

# 斜面地の



## 心豊かな暮らしがあった斜面地

41年前の夏、東京の大学生15名ほどがグラバー園に  
対面する斜面地という独特の地形のまちに張り付  
いて調査を行った。階段の一段一段の高さや幅、その階  
段の周りに建ち並ぶ家々の間取り、置いてある家具に  
至るまで、あらゆる寸法を細かく記録した。また、坂  
道を通る人々の年代や人数、それぞれの居住者の家  
族構成や一日単位の動き、さらには休憩地点の役割  
を果たしていると思われる小店や井戸跡跡などでの  
人々の動きを観察した。地中海沿岸を思わせる日差  
しと、くねくねと曲がる坂の途中から見えるまちの  
美しい風景は彼らを癒し、吹きわたる風は一服の清  
涼剤となつて、一人ひとりの体内に記憶されていった。  
そうした彼らの活動に地域の中で一番早く反応  
し、心強い手助けとなつたのは子どもたちだつた。当  
時大学2年生の私はこうしたかわい助手たちのま  
とめ役であつた。やがて、彼らの熱心さに住民も心を  
開き、家の隅々まで開放してくれた。そこから、さま  
ざまな世代の人々が斜面地を有効に活用しながら  
生き生きと心豊かに暮らす様子が見てとれた。こう  
した作業の積み重ねは、翌春、卒業論文として結実  
し、彼らにとつて、車が入らない道と軒先を重ねて建  
ち並ぶ住宅群によつて形づくられた「まち」の風景と  
人々の明るく豊かで触れ合いのある「暮らし」との出  
会いが、その後の仕事ぶりに大きな影響を与えたと  
伝え聞く。私にとつても、「暮らし」の場としての住宅  
づくりに身を置く契機となる貴重な夏であつた。

# 暮らしの 仕組み再考



坂道の途中のベンチの背もたれに付けられたプレート。斜面地ではこうしたベンチが各所に設けられ、休息や地域の人々の交流の場として利用されている。



斜面地に家々がぎっしりと建ち並ぶ長崎市十善寺地区。車両が入れない、狭い路地が家と家の間を縫うように通っている。

(有)長崎建築社 取締役室長

平野 啓子 Hirano Keiko

1948年長崎市生まれ。1971年日本女子大学家政学部住居学科卒業。2004年長崎純心大学大学院人間文化研究科(福祉文化専攻)博士前期課程修了。一級建築士。1990年より(有)長崎建築社取締役室長。住まいづくりを通して生き生きと輝く暮らしづくりに参画。NPO法人長崎斜面研究会の理事長として斜面地の暮らしの問題に取り組む。

「エコライフを生かした新しい仕組みを

斜面地に暮らす人々は、すそ野の商店街にとっては駐車場不要の消費力であり、各事業所にとっては近距離通勤の労働力である。ここでは、車を多用せず、住宅の前後の段差によって日照・通風が優れた環境負荷削減の暮らし、つまり、エコライフが織り成されている。

しかし、「暮らし」の営みがまちをつくってきた斜面地は、その後につくられた建築基準法との相性が良くないゆえに、建物の建て替えや増改築などが進まない。やがて、車活用社会で生きる若年層はこのまちを去り、空き地・空き家が多くなり、年代を重ねた住宅に高齢者が不自由ながら暮らし続けるまちとなった。斜面地の8地区(十善寺地区、江平地区、北大浦地区ほか)では、生活道路や公園などの生活基盤整備や民間共同住宅の建設促進などを行う「密集住宅市街地整備促進事業」(国土交通大臣承認)が取り組まれている。しかし、空洞化の進行に追いつかず、「暮らし」が困難な高齢者が多くなりつつあることを、訪れるたびに実感する。

地球環境の側面からも優れている斜面地において、時代に応じた多様な複合的なさまざまな世代の「暮らし」が営まれるためには、道のつくり方・移動手段の方法・建築基準法不適合への対応策・小規模な店舗や医療機関の配置方法・災害時や非常時の対応策・個人や世代ごとの各種の支援サービス手法など、現代の「暮らし」を支えるきめ細やかな仕組みへの再考が急務である。

長崎大学から望める斜面地への「暮らし」にもっともっと思いを馳せて欲しい。英知を出し合う仲間づくりへの積極的な参加が待たれている。